

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530635

研究課題名(和文) 社会ネットワークアプローチによる「食」をめぐる集合行為の検討

研究課題名(英文) A Social Network Approach to Food Activism as Collective Action

研究代表者

星 敦士(HOSHI, ATSUSHI)

甲南大学・文学部・准教授

研究者番号：90411834

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：集合行為における参加と動員のプロセスを社会ネットワーク研究の手法を応用して分析することを目的として、現代社会における「食」のあり方をめぐって展開されている日本のスローフード運動を事例に、参加者のコミットメントのあり方と、活動を通じて形成される社会ネットワークの関連を明らかにした。理論研究では社会運動理論、特にライフスタイル運動論と社会ネットワーク研究を架橋することで分析枠組みを構築し、実証研究においては日本のスローフード運動参加者を対象とした質的・量的調査から社会運動参加のメカニズムと選択的誘因としてのネットワークの影響を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research study was to investigate relationship between the organizational characteristics of social movement organizations and their social networks in the field of lifestyle movement, which actively promote way of life as their primary means to foster social change. This research approached from both theoretical and empirical studies. In theoretical studies, theoretical frame was structured by integrating the findings of studies of social movements and social networks. In empirical studies, the process and mechanism on the social movement participation and effects of social networks as selective incentives were found out by quantitative and qualitative research for participants to slow food movement in Japan.

研究分野：社会学、パーソナル・ネットワーク研究

キーワード：社会運動 社会ネットワーク スローフード

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は2つの研究分野を背景にもつ。1つは社会運動論、なかでも資源動員論に代表される集合行為への動員プロセスに着目する研究と、「新しい社会運動」と呼ばれる階級間対立に還元されないライフスタイルの自己決定権を求める市民活動に着目する研究である。一見すると前者は組織原理に基づき「動員」という観点をとるのに対して、後者は自律的な個人による「参加」を前提とするので両者は背反するよう見える。しかし、公共性の高い市民活動の持続的な展開を進めるためには、両者の接合は重要な課題といえる。

この「動員」と「参加」の相互作用を分析する目的で本研究が導入したもう1つの学術的背景が社会ネットワーク研究である。この分野は社会学に限っても多様な内容を含んでいるが、ここで想定するのは、組織形態としてのネットワーク、すなわち個人と個人、そして個人と組織を取り結ぶネットワークであり、もう1つは様々な運動組織が媒介性の高い人物や運動テーマを通じて結ばれるネットワーク、すなわち組織間ネットワークである。「参加」と「動員」を媒介する社会ネットワークと、そのネットワークを通じて交わされる意味・シンボルの機能に照準することで、集合行為をめぐる動員論と行為論を架橋することが可能となるのではないかと構想した。また、社会ネットワーク研究は計量的手法を中心に発展してきたため、「つながり」の測定手法は精緻化されてきたが、一方でなぜそのような関係の構造が人や組織にある行為を促すのか、という解釈においてはアドホックなものに偏る傾向があった。そこに、社会関係を通じた運動参加という行為と動員を扱ってきた資源動員論のような集合行為、社会運動に関する理論との接合の必要性があった。

## 2. 研究の目的

本研究では、ライフスタイル領域から社会変革を構造する今日的な社会運動の例として、スローフード運動に着目し、個人がスローフード運動にコミットする過程と、地域社会における市民活動同士がスローフードという記号を媒介にしながら結びついていく過程について、社会ネットワークという視点から明らかにすることを目的とした。具体的には以下の2つの調査テーマとして集約される。

### (1)個人が活動にコミットしていくプロセスにおける社会ネットワークの分析

資源動員論は社会関係を媒介とした動員プロセスに着目してこの問題に取り組んできた。本研究ではこの資源動員論という理論的背景に社会ネットワーク研究が蓄積してきた個人が取り持つ関係構造の測定手法を

組み合わせて、活動にコミットする個人の社会ネットワークがその関わりの中かでどのように変移し、その変移がコミットメントの強度にどのように影響を与えるのか、双方向の影響を計量的に明らかにする。

### (2)「スローフード」という記号を媒介とした市民活動のネットワークの分析

日本のスローフード運動の大きな特徴は、この活動が「スローフード」というキーワードの曖昧さゆえに、活動分野の異なる人々を結びつける媒介役として地域社会におけるボランティアな諸活動の結節点となりえる点である。そこで本研究では、コンヴィヴィウム(地域におけるスローフード運動の活動拠点の名称。運動参加者は「スローフード」( )は地域名)といった名称のコンヴィヴィウムに所属する)を単位とした活動実態を把握する調査を行った上で、まちづくり・地域振興、観光、教育といった分野においてスローフード運動が他の市民活動と創造的なネットワークを形成している事例・地域をピックアップして、その展開プロセスを現地調査によって明らかにする。

## 3. 研究の方法

以上の研究目的を遂行するために、2種類の量的調査(コンヴィヴィウムを調査単位とした組織調査とスローフード協会に所属する会員を調査単位としたアンケート調査)と、特定の地域内におけるスローフード運動、市民活動のネットワークを対象とした質的調査を実施した。各調査の概要は以下のとおりである。

### (1)組織調査

日本のスローフード運動において会員登録や管理、ニューズレターの発行を担っているナショナルオフィス「スローフードジャパン」の協力を得て2012年5月から7月にかけて郵送法による組織調査を行った。調査時点において所在が確認された41のコンヴィヴィウムに調査票を発送し、31のコンヴィヴィウムより回答を得た。

### (2)アンケート調査

組織調査と同様に「スローフードジャパン」の協力を得て2013年7月から8月にかけて郵送法によるアンケート調査を行った。調査では、会員としての資格有効期限が2012年1月1日以降の日付になっている1,176人を対象とした。調査実施時点において有効期限が切れている会員も含まれているが、正式に退会申請がされていない場合は本人の継続参加意思の有無にかかわらず更新保留の扱いとなっており、スローフードジャパン、コンヴィヴィウム、会員本人の間で退会意思の確認をとることに時間がかかるケースもあることから、おおよその猶予期間として調査前年までは資格を有していた会員も含め

ることとした。

調査対象とした1,176人のうち、現在の居所が不明で調査期間中に新たな送付先を確認できなかったケース、会員名簿には掲載されていたものの既に退会したことが確認されたケースなどが15件あった。これらを除いた調査対象者数は1,161人である。調査ではこのうち424人から調査票の返送があり、白紙等の理由で無効にすべき調査票はなかったことから、有効回収票数は424件、有効回収率は36.5%となった。

### (3)事例調査

日本のスローフード運動の特徴、すなわち「スローフード」というキーワードの曖昧さ、解釈の幅広さゆえに、この運動が活動分野の異なる人々を結びつける媒介役として地域社会におけるボランタリーな諸活動の結節点となっている点に着目し、スローフード運動が他の市民活動と創造的なネットワークを形成している事例としてスローフード山形の活動に注目してその活動の展開プロセスを明らかにした。

また研究期間全体を通してスローフード運動の当事者（各地のリーダー、参加者）を対象としたインタビュー調査を継続的に実施した。参加のきっかけから運動へのコミットメントが深まるプロセス、参加を通して形成されたネットワークの広がりとその機能といった個人の経験に焦点を当てた調査と、日本におけるスローフード運動の経緯、今までの展開と課題、スローフードとは何か、日本における今後の活動展開の可能性など運動全体の動態に焦点を当てた調査を行い、アンケート調査と組織調査の調査設定および分析結果の解釈に資する情報を収集した。

研究目的との対応関係から整理すると、アンケート調査によって得られたデータを用いて「個人が活動にコミットしていくプロセスにおける社会ネットワークの分析」を行い、組織調査によって得られたデータと事例調査から「「スローフード」という記号を媒介とした市民活動のネットワークの分析」を行った。また継続的な運動関係者へのインタビューによって分析結果のフォローアップを行った。

## 4. 研究成果

### (1)日本のスローフード運動の多様性（組織調査の結果より）

日本のコンヴィヴィウムはスローフード運動の基本的なミッション、すなわち「生物多様性の保護」「生産者と消費者を結ぶ」「味覚教育」を共有しつつも、それぞれが独自の理念をもって多様な活動を展開している。そこには、スローフードという言葉に対して運動参加者もつイメージの多様性、そしてそれぞれの土地における運動の受容のされ方

を見ることができる。国内のコンヴィヴィウムが現在どのような活動に取り組んでいるのか確認した結果が図1である。

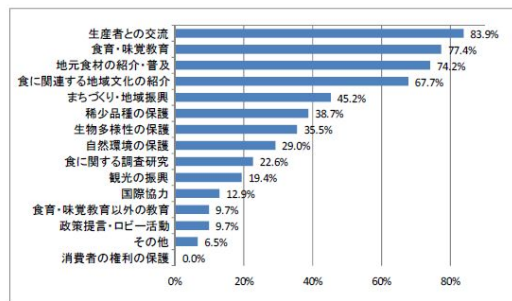


図1 コンヴィヴィウムの活動分野(複数回答可)

アンケートで提示した様々な活動分野のなかで最も多く選ばれたのは「生産者との交流」、次いで「食育・味覚教育」、以下「地元食材の紹介・普及」「食に関連する地域文化の紹介」であった。選ばれた選択肢の数に着目すると、最も少ないコンヴィヴィウムで3つの活動分野を、逆に最も多いコンヴィヴィウムでは11の活動分野を選択していた。平均値は5.42、すなわち今回の調査では1つのコンヴィヴィウムあたり平均して5~6種類の活動分野が選ばれていた。スローフード運動の3つの基本的なミッションのうち、「生産者と消費者を結ぶ」と「味覚教育」に関連する活動はほとんどのコンヴィヴィウムに選択されている一方、「生物多様性の保護」の取り組みについては、一部のコンヴィヴィウムに限られている。

図2・図3は、活動分野間の関係（分野同士が一緒に選ばれる傾向があるかどうか）とコンヴィヴィウム間（同じような活動分野を選ぶ傾向があるかどうか）を、質問への回答パターンの関連とそれに基づいて回答者間の類似性を明らかにする多重応答分析によって2次元の平面上に表現したものである。図2は活動分野間の距離を表しており、図3はそれに基づいてコンヴィヴィウムの類似性を示している。

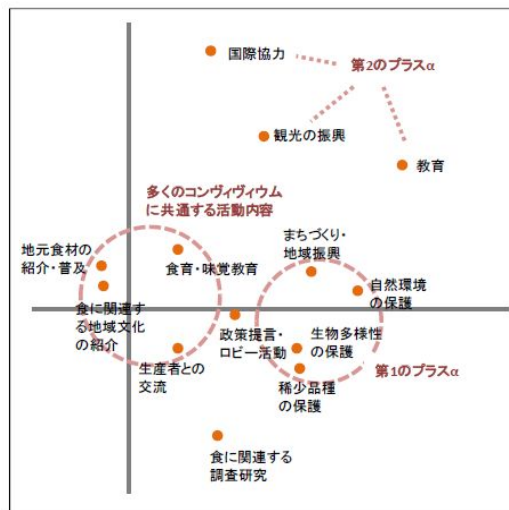


図2 活動分野の選択からみた項目間関係

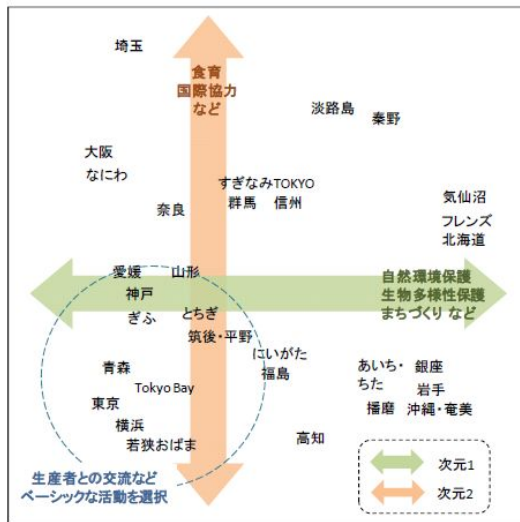


図3 活動分野の選択からみたコンヴィヴィウム間の関係

図2をみると、項目間の位置関係から相互に選ばれやすい分野があることが分かる。たとえば、「まちづくり・地域振興」と「自然環境の保護」、「生物多様性の保護」と「稀少品種の保護」は距離が近く、同様に「地元食材の紹介・普及」、「食に関する地域文化の紹介」、「食育」、「生産者との交流」の4分野も一緒に選択されやすい傾向がある。一方、「(食育以外の)教育」、「観光の振興」、「国際交流」などは特定の項目と近い関係にはなく、これは、たとえば同じように「国際交流」を選んだコンヴィヴィウム同士でも、それ以外に選択した活動分野は互いに異なっている場合が多いことを示している。

次に、活動分野の選択からみたコンヴィヴィウム同士の位置関係を同じく平面上に図示した結果(図3)をみると、スローフード運動の多様性のなかにも、活動分野の幅広さ、重複の度合いやその内容によって、ある程度活動が似ているコンヴィヴィウム同士のまとまりがあることが分かる。「生産者との交流」や「地元食材の紹介・普及」、「食に関する地域文化の紹介」といった多くのコンヴィヴィウムが共通して取り組んでいる分野を選択したコンヴィヴィウムが図内の左下にまとまって位置付けられている。次元1の方向には、「自然環境の保護」、「生物多様性の保護」、「稀少品種の保護」、「まちづくり・地域振興」に取り組んでいるコンヴィヴィウムが分布している。一方、次元2の方向をみると、多くのコンヴィヴィウムが共通して取り組んでいる活動に加えて「食育」や「国際交流」に取り組んでいるコンヴィヴィウム、あるいは「生産者との交流」などのベーシックな活動とは異なる分野に取り組んでいるコンヴィヴィウムが位置している。それぞれのコンヴィヴィウムが選択した活動分野の数や内容から、次元1は生産者との交流、地元食材の紹介など多くのコンヴィヴィウムに共通する活動に加え、生物多様性や稀少品種、自然環境の保護といった生物・自然系の活動を

取り入れているかどうか、次元2は国際協力や観光振興など文化活動を取り入れているかどうかを表していると考えることができる。選択した活動分野が同じでもそのなかで特に力を入れているものは違っていたり、活動への取り組み方が異なっていたりということはあると思われるが、日本のスローフード運動を大きく分けるならば、自然・環境系の活動と地元志向系の活動、それぞれにどのようなバランスで取り組んでいるか、加えて、国際交流や調査研究、政策提言など他のコンヴィヴィウムが取り入れていない活動に取り組んでいるかどうかという基準で類型化できることが示された。

(2)運動へのコミットメントにおけるネットワークの役割(アンケート調査の結果より)

運動関係者への継続的なインタビュー調査から、スローフード運動は政治的イシューについて係争課題と敵手を設定して問題の存在を告発する、抗議活動やデモンストレーションによってアピールすることよりも、スローフードの思想や理念に賛同する人々の間でつながりをもちそれを広げること、食とライフスタイルに関する価値観を共有し、生産と消費の関係や地域の食文化を学ぶ、捉え直す、発見することを運動レパートリーとして採用していることが示された。さらに、強い意志決定プロセスと組織化よりも、活動においては「自由さ」「なんでも言えること」「ヨコのつながり」が重視される傾向にあった。運動の理念や目標をどのように具体化するかは、それぞれのコンヴィヴィウムの自主性に、そして参加者個人の生活実践に強く委ねられていた。

社会運動としてこのような特徴を有することは、運動参加へのハードルを低くし、様々なきっかけで「食」に興味・関心をもつ多様な人々が運動に関わることを可能にする一方で、「われわれ意識」のような集合的アイデンティティが形成されにくく、取り組むべき課題や方向性について曖昧な印象も与える。また様々な動機をもつ多様な参加者たちの期待やリクエストすべてに応えることができるわけではないので、コンヴィヴィウムの活動内容が自分の関心と合わなかったり、興味が薄くなったりすると運動からの離脱にも繋がる。そこで、アンケート調査から得られたデータを用いて、運動に継続的に参加していこうと考えている人々の特徴を、目的誘因(やりがいや満足感)と連带的誘因(ネットワーク)の効果に着目して明らかにした。

分析の結果(図4)運動への継続参加要因としてやりがいや満足感といった目的誘因の効果が高いことは、ライフスタイル運動としての特徴、すなわち日常生活における実践に対する喜びややりがい、言い換えるならば、そのような実践が社会を良い方向に変えていく、身近なところからもう一つの社会を

つくっていくというある種の信念が重要であることを表している。

では楽しければどんな動機付けでも継続的に参加し続けるかというそうではない。目的誘因は運動理念・目標の理解と連带的誘因(ネットワーク)に強く規定されていた。これは、スローフード運動の理念や目標、どのような活動をするのか、といったことを理解しないと、楽しさややりがいは生まれないことを意味する。珍しさや流行、グルメへの興味といった動機付けで参加しても継続的な参加に繋がらないのは、このようにスローフード運動の理念や活動内容に対する理解がないと活動に参加しても楽しさややりがいを感じにくいという構造に起因すると思われる。また連带的誘因の影響については、日常生活における実践を重視するライフスタイル運動においても、運動を通じて形成されたネットワーク、すなわち他の参加者とのつながりによって得られる共感や考え方の共有が、楽しさややりがいに繋がることを示している。生産者と交流すること、地域の食材について知ることに楽しさややりがいを感じるのは、他の運動参加者たちと食のあり方などについて考え方が共有されてこそと言える。また運動の理念や目標を理解しないとその面白さには気づかないし、他の参加者との相互理解も生まれえないという意味では、従来の社会運動論において提起されてきた運動理念や目標の受容プロセスへの着目(例えばフレーミング分析)や、参加者間のつながりを介した運動の広がり(例えば資源動員論におけるネットワーク概念、動員構造論)といった運動参加の認知的、構造的要因からのアプローチも有効であることが示された。

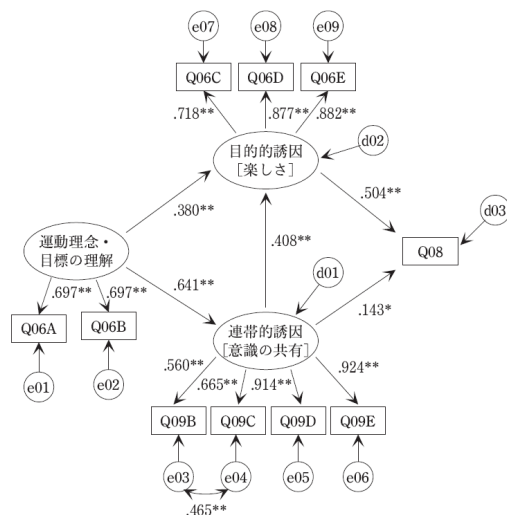


図4 今後の参加意欲 (Q8) に関する共分散構造分析の結果

### (3) 食のローカリティをめぐるアクター間のネットワーク (事例調査の結果より)

スローフード山形を対象とした事例調査からは、日々の生活上の選択の積み重ねとスローフード運動との連関、スローフードというキーワードを媒介に取り結ばれた様々な

市民活動のネットワークを描くことを通して、個々の生活のあり方に基礎づけられた活動の積み重ねが、その地域に固有のスローフード運動の社会的意義をいかに形作っているかが示された。

調査では映画「よみがえりのレシピ」制作に対するスローフード山形の協力過程とネットワークの広がりを目指すなかで、食のローカリティを発掘する試みの有機的つながり、それ自体が運動を意味づけていることが明らかになった。言い換えるならば、スローフード運動とは政治的イシューについて係争課題と敵手を設定して問題の存在を告発する、抗議活動やデモンストレーションによってアピールすることではなく、「つながること」すなわち食をめぐるフィールドのなかで別個に活動してきた多様な背景をもつアクターたち(生産者・行政・研究者・料理人・メディア関係者)が「スローフード」という記号を媒介に結びつき地元の文化と在来作物の価値を再構築していくプロセスそれ自体が運動を形作っていることがインタビュー調査から明らかになった。

本研究ではこのプロセスにおけるスローフード山形の果たした役割に「フレーム調整」「フレーム架橋」概念からアプローチし、スローフード運動が個人と個人、組織と組織を結び多様かつ多層的なネットワークのなかで「社会をかえる」ことではなく「社会をつくる」という形で展開していること、そしてネットワークそのものが運動の本質であることを浮き彫りにした。

### (4) 今後の課題と展望

本研究の分析結果から、強固な運営組織を持たず、異議申し立てや抗議、係争課題に関わる集合的アイデンティティよりも日常的な生活実践のなかで運動理念を見いだすようなライフスタイル運動とも呼ばれる社会運動では、運動への参加を組織による「動員」として説明することは難しく、参加者間のゆるやかなネットワーク形成と、その内部における理念の共有と共感の体験からとらえる必要があることが示された。

ただしライフスタイル運動における参加者間のネットワークの形成と、その内部における「語り合い」「学び合い」といった相互行為の関係、そしてそのような相互行為が運動へのコミットメントに与える影響については今回の研究では一部の事例調査からの示唆にとどまっており、参加者個人、ネットワーク、そして社会運動それぞれの時間的変化を含めた研究が求められる。

また、個人の生活実践がゆるやかなネットワークを形成するところからどのように集合行為としてまとまりをもつように至るのか、ライフスタイル運動で重視されている日常生活における実践の積み重ねが、集合行為として瞬間的な流行現象ではなく持続的な社会運動に展開するためにどのようなネッ

トワークが必要なのか、フェアトレード運動やロカボアなど活動領域が近似している他の社会運動との比較も含めて、ネットワーキングと集合的アイデンティティ形成の相互作用を、既存の諸理論を踏まえた理論枠組みの構築とその検証から明らかにすることが今後の課題といえる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### [雑誌論文](計1件)

星敦士・宮田尚子, 2015, 「ライフスタイル運動における選択的誘因 スローフード運動における継続参加意欲の分析」『甲南大学紀要文学編』(査読無) 165: 159-167.

### [学会発表](計2件)

本郷正武, 「記号」としてのスローフード フレーム調整プロセスからの捉えかえし」第61回東北社会学会大会(於秋田県生涯学習センター分館ジョイナス) 2014年7月26-27日.  
宮田尚子・星敦士, 「運動参加要因としての心理的コミットメント」第65回関西社会学会(於富山大学), 2014年5月24-25日.

### [図書](計1件)

碓井崧・星敦士, 2013, 「日本におけるスローフード運動の展開」碓井崧・松宮朝編著『食と農のコミュニティ論』, 創元社, 192頁(162-177).

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

星敦士 (HOSHI ATSUSHI)  
甲南大学・文学部・准教授  
研究者番号: 90411834

### (2) 研究分担者

本郷正武 (HONGO MASATAKE)  
和歌山県立医科大学・医学部・講師  
研究者番号: 40451497

### (3) 研究協力者

宮田尚子 (MIYATA NAOKO)  
同志社大学・同志社大学 高等教育・学生研究センター・特別研究員